SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

バティモン5　望まれざる者

2023年／フランス・ベルギー合作映画
配給：STAR CHANNEL MOVIES／105分

2024（令和6）年6月1日鑑賞　テアトル梅田

Data　２０２４－４１

監督：ラジ・リ
脚本：ラジ・リ／ジョルダーノ・ゲデルリーニ
編集：フローラ・ボルピエール
出演：アンタ・ディアウ／アレクシス・マネンティ／アリストート・ルインドゥラ／スティーヴ・ティアンチュー／オレリア・プティ／ジャンヌ・バリバール

みどころ

1984年5月の「大阪駅前第二ビル再開発問題研究会」への参加を契機として、都市再開発問題に興味を持ち、公害問題に代わる新たなライフワークにした私には、1989年に視察したフランスの再開発事情が大いに勉強になった。しかして、ラジ・リ監督が『レ・ミゼラブル』（19年）に続いて描く、フランスのモンヴィリエ地区にある「バティモン5」をめぐる再開発は？

日本と違い移民問題が深刻なフランスでは、「移民対策用」の劣悪な環境の集合住宅があるから、その建て替えや再開発は大変だ。まして、旧ビルのクリアランスのための爆破で事故が起き、市長が急逝してしまうと・・・。

新任（代理）市長が強硬派で「ダメ」なら、私が市長に立候補して、市政の刷新と「バティモン5」のあるべき再開発を私の手で！マリにルーツを持つ、若い女性がそんな決意で立候補する姿は、来たる7月7日の東京都知事選挙に「今なら勝てる！」との皮算用でにわか参戦してきた蓮舫氏とは大違いだ。

しかし、コトは一人の女性の力だけで容易に動くものではない！“法治国家”フランスの再開発事業の現場における“強制執行”の実態をつぶさに見聞しながら、都市再開発事業のあるべき姿を共に考えたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■このタイトルはナニ？何の映画？ラジ・リ監督とは？■□■

本作のチラシには、“『レ・ミゼラブル』ラジ・リ監督最新作”とあり、“ここにはあなたが知る「パリ」はない”、“これは、花の都が抱える“不都合な現実（リアル）”ー今こそ暴かれる、パリの素顔に切り込んだ衝撃作”の文字が躍っている。しかして、本作の邦題『バティモン5』とは一体ナニ？

『レ・ミゼラブル』と聞けば、誰でも日本語では「ああ、無情」と翻訳された、ビクト

ル・ユゴーの名作を思い出すはず。また、ブロードウェイでも、劇団四季でも大ヒットした、ミュージカル『レ・ミゼラブル』を思い出すはずだ。しかし、おっと待った！！上記チラシの『レ・ミゼラブル』はそれではなく、第７２回カンヌ国際映画祭審査員賞を受賞した上、第45回セザールで作品賞を含む4冠等、各国の映画賞を総なめにして、世界に衝撃を与えたラジ・リ監督の『レ・ミゼラブル』（19年）（『シネマ46』120頁）のことだ。

ラジ・リ監督の両親はマリ共和国の出身。ラジ・リ自身もマリ共和国の生まれで、3歳の頃にフランスの首都パリ郊外のモンフェルメイユ市に移り住み、そこで育った移民2世だ。このパリ郊外のセーヌ＝サン＝ドニ県にあるモンフェルメイユ市は、ビクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』の舞台になったところだが、今や移民や低所得者が多く住む危険な犯罪多発地域になっているらしい。しかして、彼のデビュー作となった上記『レ・ミゼラブル』はそのモンフェルメイユ市を舞台にしたセンセーショナルな映画で、そこで描かれた人種差別、貧困差別は、『ウエスト・サイド物語』（61年）のフランス版だった。また同作は、毎年11月にパリ首都圏で開催されている「郊外映画祭」の典型的な「郊外の映画」だった（『シネマ46』126頁）。

『レ・ミゼラブル』が、ラジ・リ監督が生まれ育ったモンフェルメイユ市で、実際に見聞きしてきた出来事を元に作られた作品だったのと同じように、本作も、ラジ・リ監督自身の実体験が出発点になったそうだ。本作の邦題になっている『バティモン5』は10階建ての集合住宅の5号棟を指す架空のものだが、その舞台は『レ・ミゼラブル』と同じ、ラジ・リ監督が生まれたパリ郊外のモンフェルメイユ市だ。しかし、なぜラジ・リ監督はそんなにパリ郊外（＝それをフランス語では「バンリュー」と呼ぶそうだ）のモンフェルメイユ市にこだわるの？

■□■冒頭の撮影と爆破風景にビックリ！市長の交代劇は?■□■

私が生涯のベスト1に挙げる映画は、『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）。大学受験の直前であったにもかかわらず、映画館で7回も見たから、すごい。同作の冒頭、アルプスの山頂で修道女マリア（ジュリー・アンドリュース）が「The hills are alive」からはじまる歌詞の曲「The Sound of Music」を歌うシーンは、遥か遠くからどんどんマリアに近づいていく空中撮影の手法が素晴らしかった。本作冒頭は、それと同じ撮影手法で、カメラが「バティモン 5」に向かってグイグイと近づいていくので、それに注目！この地域一帯を再開発するためにはまずは“クリアランス”が不可欠だ。

日本の都市再開発法は「従前権利と従後権利は等価である」ことを大原則としているし、個人の人権と財産権が最大限保障されている。しかし本作では、古い高層住宅を爆破する風景が登場するので、それに注目！再開発事業におけるそんなやり方にビックリなら、何とその爆破によって、参列していた市長が死亡してしまったから、アレレ、アレレ・・・。この責任は一体誰が、どのように取るの？

それも大問題だが、日本では2000年4月に小渕恵三総理が死亡した直後に、森喜朗、

野中広務、青木幹雄、村上正邦、亀井静香ら“五人組”が、密室の会合で森喜朗首相の擁立を決めたことが、“五人組による密室劇”として批判された。それと同じように、本作でもごく内輪だけの投票で、亡き市長の後釜としてピエール・フォルジュ（アレクシス・マネンティ）が新市長に就任したが、彼の「バティモン5」再開発に対する姿勢は如何に？

数年に一度の市長の交代によって、10年以上も続いている市街地再開発事業の方向性に大きな影響が出ることを、私は弁護士として担当した徳島の新町地区再開発を巡るドタバタ劇で嫌というほど味わったが、市長の急逝によって臨時市長となった医者のピエールは、汚職を追及されていた前市長とは異なり、クリーンな政治活動を行う若き政治家だから、徳島とは違い、ひと安心！そう思っていたが、行政と住民との対立が激化する中、バティモン5の治安維持のために強硬手段を取り続けるピエールの姿に私はビックリ！

日本の「都市再開発法」は昭和44年に制定された法律で、都市計画法、建築基準法と共に「近代都市三法」の骨格となる基本法だ。1984年5月の「大阪駅前第二ビル再開発問題研究会」への参加をきっかけに、都市再開発法と同法に基づく市街地再開発事業に興味を持った私は以降、都市問題をライフワークとしてきた。そのため、1989年に数名の仲間と共に出かけたイギリス、フランス、ドイツ等の「都市再開発事情の視察」では、フランスの再開発事情もじっくり見学した。もっとも、「バティモン5」の再開発は全く知らなかったが、本作に見る移民用の集合住宅の老朽化と劣悪化はひどいものだ。

■□■ならば私が市長選挙に！さすが、革命の国フランス！■□■

今年1月26日から6月23日まで150日間も続く日本の国会のだらしなさ＝機能不全ぶりは、6月6日に衆議院で成立した「政治資金規正法改正」の内容やそこに至る経過を見れば明らかだ。それと同じように、本作導入部に見る、古い再開発ビルの爆破手法をめぐるモンヴィリエ市議会の不手際と、急逝した市長に代わる新市長選びの不手際も、目に余るものがある。前市長は、移民出身ながらモンヴィリエ市の副市長として都市計画分野を担当するロジェ・ロシュ（スティーヴ・ティアンチュー）を主に住民対策の分野に重用していたが、それは新任（代理）市長のピエールも同じだ。もっとも、ロジェはこれまでずっと当局と住民間の仲介役の役割を果たしてきたが、居住棟エリアの復興と治安改善を政策に掲げ、理想に燃えるピエールは一切住民側の要求に譲歩する姿勢を見せなかった。そのため、移民のケアスタッフとして働く、マリにルーツを持つフランス人女性アビー（アンタ・ディアウ）は、新市長にも、ロジェにも猛反発！「バティモン 5」の住民たちにしっかり寄り添うためには、市政そのものの刷新が不可欠！そして、そのためには、私が市長選挙に立候補してピエールの“圧政”をやめさせなければ！そこまで決意し、直ちにそれを行動に移したから、アビーはすごい。

来る7月7日に投開票を迎える東京都知事選挙には多くの立候補者が乱立しそうだが、本命は、現職の小池百合子氏vs立憲民主党出身の蓮舫氏の2人。この2人は、両者ともニュースキャスター出身で、口が達者なら、資金も豊富に持っている。しかし、アビーは資

金もスタッフもゼロからの出発だから、所詮泡沫候補？そう思っていたが、意外にも・・・。さすが、革命の国フランスだ。住民運動もすごいし、選挙運動もすごい。もっとも、アビーの選挙運動は次第に過激になっていくから、それが少し気がかりだが・・・。

■□■恋人の行動に見る強硬路線・暴力路線はいかがなもの？■□■

ラジ・リ監督は、常にドキュメンタリーとフィクションの境界線を歩いてきたが、本作では再開発の現場はドキュメンタリータッチで、アビーとその恋人ブラズ（アリストート・ルインドゥラ）との恋物語はフィクションタッチで描いていくので、それに注目！もっとも、「バティモン5」の住人で、移民のケアスタッフとして働いているアビーと、アフリカのルーツを持つ青年ブラズは互いに恋心を抱いていたが、再開発問題や政治に目覚めたアビーが市長選挙に立候補すると、政治問題にあえて関心を示さないブラズとの間で溝が深まっていくことに・・・。

ブラズは当初からモンヴィリエ市の行政に強い怒りを抱いていたが、前述した明け渡しの強制執行の姿を見て、ついに“ある行動”を決意したようだ。しかして、それは一体ナニ？その行動とその結末はあなた自身に確認してもらいたいが、血の気の多い今時の若者にありがちなこの手の行動、暴走は如何なもの・・・！？

■□■強制執行の姿に注目！法治国家のあるべき姿とは？■□■

フランスは「人権の国」と言われている。しかし、私に言わせれば、日本はフランス以上に人権の国だ。もちろん、それは皮肉な言い方だ。日本は法治国家であるにもかかわらず、法に基づく強制執行をすると、弱者に対する配慮が足りないと批判されるため、事実上強制執行はできなくなっている。そのことを、大阪市内に住む私は、いわゆる中之島の“青テント問題”で痛感した。それについて、「断固強制執行の手法を取る」と宣言し、その言葉どおりの強制執行を断行したのが橋下徹元大阪市長だった。しかして、本件では、「バティモン 5」の取り壊しと住民の明け渡しをめぐって、大阪の中之島地区の青テントを巡って起きた問題と同じような、“強行策”が展開されるので、それに注目！

私は弁護士業を50年間もしているが、それでも住民の明け渡しの強制執行に現実に立ち会ったことは一度もない。犬や猫の明け渡し（？）ならともかく、柱にしがみついて離れない人間の強制的な明け渡しなど、日本では事実上不可能なわけだ。しかし、フランスのバティモン5地区では、決められた日時までに、手荷物だけ持って建物内から出ていく強制執行手続が大勢の機動隊が見守る中で粛々と強行されるから、それに注目！エレベーターもない高層階の窓からはソファーや布団のみならず、家具まで吊り下げながら落下させていくから、こりゃすごい。さらに、明け渡しが完了した後、路上をいっぱいに占拠した家具の中で、建物から追い出された住民がしばしの暖を取り、軽食を食べていると、当局は更に・・・ある意味でこれが本来の法治国家のあるべき姿だが、さて、あなたはラジ・リ監督が本作のスクリーン上で次々と見せつけてくるフランスのバティモン5地区の再開発をめぐる強制執行の実態を、どう考える？　　2024（令和6）年6月7日記